COVID-19 の影響を受け実施した在宅看護学内実習の評価と今後の課題

The evaluation of on-campus home nursing care placement and the future challenge under COVID-19 influence

壬　生　寿　子　　日　當　ひとみ　　田　向　たまき

要旨

在宅看護実習は臨床での実習とは異なり、人々の生活の場での活動であり、母性、小児から高齢者、終末期を含むすべてのライフステージの人々が対象となり、活動内容も多岐にわたる。しかし、この度の COVID-19 の影響を受け、学内実習が余儀なくされ、療養者・家族への看護の展開は、在宅療養生活をイメージしながら紙面上での体験となった。今回の学内実習の実践内容を報告するとともに、実践から見えた学生の学びと実習内容の課題を明らかにし、今後の在宅看護教育における、実習のあり方を検討する資料とすることを目的とした。

分析対象は在宅看護学内実習を履修した看護学科 4 年生 59 名が提出した「在宅看護学内実習まとめレポート」に対して、研究に同意が得られたレポートを研究対象とした。

分析の結果、327 の「学び」と 129 の「意見」の合計 456 コードが抽出され、67 サブカテゴリー、10 カテゴリー、5 コアカテゴリーが導きだされた。そして、学生の学内実習における「学び」は【在宅看護の特徴と看護の実際】、【地域連携・地域包括ケアシステムの理解】、【訪問看護師の役割・姿勢】、学内実習になったことでの実践内容に対する「意見」では【実習指導に関する意見】、【学生の自己成長に関する気づき】のコアカテゴリーが形成され、学生は学内実習体験を通して、自己の課題・目標について考えを深めていた。また、在宅看護学内実習の指導内容の充実の必要性と今後の在宅看護教育における実習のあり方についての課題が明らかにされた。

キーワード：　COVID-19　　在宅看護　　学内実習　　評価

Ⅰ．はじめに

看護学における臨地実習は講義や演習での学びを統合させ、個別の対象者に合わせた看護の提供や実際の看護実践のダイナミックスの中での体験を通して学んだ看護を基に、必要な知識を身に付けるために重要である。しかし、COVID-19 の影響を受け、全国規模で教育機関へ影響が及び、特に看護系大学など医療系の教育機関にとっては、実習を控えていることから、対応への方策が各校で検討されている。日本看護系大学協議会で実施した調査「新型コロナウイルス感染拡大にかかる、看護系大学への影響及び対応に関する調査」（第 2 弾）の回答結果では 48.7％の大学が実習内容を変更している[1)]。また、文部科学省からの「新型コロナウイルス感染症に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」の内容では「実習中止、休講等が生じ、授業の実施期間が例年に比べて短縮された場合であっても、必要な単位もしくは時間を履修し、又は必要な単位もしくは時間を履修して卒業（修了）した者については、従来どおり、各医療関係職種等の国家試験の受験資格が認められること」「実習施設等の代替が困難である場合、実情を踏まえ実習に変えて演習または学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を習得することとして差し支えない」とある[2)]。このような状況の中で、

本学においても実習施設の受け入れが困難であることなどを踏まえ看護学科内で協議をすすめ、すべての臨地実習を学内で実施することとした。在宅看護実習は臨床での実習とは異なり、人々の生活の場での活動であり、母性、小児から高齢者、終末期を含むすべてのライフステージの人々が対象となり、活動内容も多岐にわたるため、学生の多くは臨床での実習体験との相違に戸惑いを感じているものと推察される。また、対象者の病態等の理解に加え、地域で生活する生活者として捉えたうえでの看護過程展開の理解が必要である。さらには、今後の地域共生社会の中での対象の理解のためには臨床看護と在宅看護の相違体験も重要な要素である。しかしCOVID-19の影響を受け、学内実習になったことにより、生活の場である臨地に出向くことができず、療養者・家族への看護の展開は在宅療養生活をイメージしながら、紙面上での体験となった。COVID-19 禍での学内実習の展開は、教員にとっても初めての体験であるため、臨地での体験につなげられるような実習内容を検討し、試行錯誤しながら学内実習を試みた。再度、学内実習が起こりうる可能性を踏まえ、今回の学内実習の実践内容を報告し、実践から見えた学生の学びと実習指導内容についての課題を明らかにし、今後の在宅看護教育における実習のあり方の検討資料とすることを目的とする。

Ⅱ．用語の定義

本研究で用いる「学び」とは在宅看護学内実習を通して理解したことや認識、「意見」とは実習内容、指導に対する要望・改善点・全体を通しての感想の記述とする。

Ⅲ．研究方法

1.研究対象及びデータ収集方法

本学で2020年度に在宅看護学内実習を履修した4年生59名が、実習終了後に提出したA4用紙 1 枚の「在宅看護学内実習まとめレポート」（以後レポートとする）のうち、研究の趣旨や研究方法について、同意を得られたレポートのみを研究対象とした。レポートは「学内実習での学び、学内実習内容に対する意見・感想」を記載内容とした。また、実習内容の平等性を考慮し、実習期間中も学生の意見を取り入れながら展開し、指導内容について実習時期による相違の有無を分析するため、レポートの個人名は削除したが、実習期間の明記はそのまま残し使用した。

2.分析方法

内容分析の手法を用いて分析した。在宅看護の「学び」、実習内容への「意見」に関連する記述を抽出したのちコード化し、内容が一文一義であるように区切り一文章を一記録単位とした。次に個々の記録単位を意味内容が類似しているもの毎に帰納的に分類し、カテゴリー化した。記述内容の類似性によりサブカテゴリーを抽出後、分類整理しカテゴリーとした。最終的にカテゴリー間の関連を検討し、「学内実習における学び」「学内実習内容に対する意見・感想」それぞれのコアカテゴリーを抽出した。また、実習内容の平等性を確認するために11週間の実習期間を2分割の前半グループ・後半グループに区分し、記載内容の分析をした。レポート内容は研究者 3 名で精読し分析を行った。文中ではコアカテゴリーを【　】、カテゴリーを『　』、サブカテゴリーを≪　≫生データを“　”で示す。

3.倫理的配慮

学生に研究の目的・方法について2020年11月18日、口頭および文書で、レポートは研究以外には使用しないこと、参加は自由であり成績には全く影響しないこと、同意後も撤回できることを説明し、書面で同意を得た。また、個人名は削除するが、実習期間の明記を残すことは、実習時期による相違の有無を分析するためのものであり、個人を評価するものではないことの説明を加え、同意の得られたレポートをコピーし分析に使用した。

本研究は、八戸学院大学・八戸学院短期大学研究倫理委員会の承認を得て、実施した。（受付番号 20-14）

Ⅳ．在宅看護学内実習実施内容

既存の在宅看護学実習要項を基に学内実習用に内容を一部変更し、実施した。

1．実習目的

健康障害を持ちながら、在宅療養をしている個人とその家族を対象とした在宅ケアの意義を理解し、すでに学習した知識・技術を統合させ、個人とその家族の QOL を考えた看護を提供し、より良い健康生活を作り出す一翼を担う在宅看護の理論と技術を学ぶ。

2．実習目標

1）療養者の身体的・精神的・社会的側面を捉え、家族との療養生活を理解ができる。

2）在宅看護の理論と知識を統合させ、看護援助方法を理解できる。

3）訪問看護過程を展開できる。

4）訪問看護活動の概要を理解し、訪問看護ステーションの役割と機能を理解できる。

5）保健・医療・福祉の連携や継続看護、地域包括ケアシステムについて理解できる。

6）倫理的配慮マナーを意識して実習に臨む。

3．実習方法

1）実施時期

2020 年 5 月 18 日～7 月 31 日　11 週間

2）実習期間および時間

実習期間は 2 週間、実習時間は 90 時間

3）実施時期は 4 年次春学期

4）学生数 59 名、1 グループを学生 4～5 名の編成とし、1 クール（2 週間）を 2～3 グループで 9～10 名の学生が実習した。

5）従来の臨地実習は、学内実習 3 日間、訪問看護ステーション 5 日間、地域包括ケアシステム理解のために、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所など、実習期間中に訪問看護ステーションの関連施設実習を 2 日間組み入れている。今回の学内実習では、地域包括ケアシステムの理解については非常勤講師、担当教員による講義を計画した。

6）学内実習の方法と内容　　（表１）

＜1 週目＞

(1) 訪問看護活動をイメージしながら、脳梗塞後遺症、認知症、パーキンソン病、ALS、統合失調症、小児（未熟児・障害児）、がん終末期、慢性呼吸器疾患（HOT）などの対象 10 事例を提示した中から興味関心のある 5 事例を学生に選択させ、訪問看護体験演習を実施する。

(2) (1) で選択した 5 事例の中から、受持ち事例として 1 事例を選定し、情報を基に訪問看護過程の展開をプレゼンテーションし、その後ロールプレイを実施する。その他の 4 事例は訪問を想定し、記録上での訪問看護演習を実施する。

(3) 訪問回数は受持ち事例が 3 回、訪問看護演習事例が 4 回（各 1 回）の計 7 回とする。

(4) 地域包括ケアシステム・多職種連携・継続看護理解の理解を深めるため、事前学習の資料を活用し、DVD 学習、講義を受ける。

(5) 在宅医療支援のための訪問看護の看護技術として、清潔・排泄援助、褥瘡管理、膀胱留置カテーテル法、経管栄養法、在宅人工呼吸療法、HOT、訪問リハビリテーション、感染管理、苦痛緩和と在宅看取りなど、①目的と療養者の特徴、②アセスメント、③手技（必要物品・手順など）について、各自の実習事前課題の資料、在宅看護学概論（2 年次）・在宅看護援助論（3 年次）の講義資料を活用し、DVD や Web 動画で学習後実技演習をする。

(6) 臨地実習を依頼している訪問看護ステーション所長を非常勤講師として 1 週間に 1 日招聘した。1 週目は訪問看護ステーションについてのオリエンテーション、役割・機能、活動内容について、2 週目は訪問看護の実際場面の紹介と在宅看取りについての講義・指導を受ける。

表１　在宅看護学内実習プログラム

曜日	月	火	水	木	金
１週目	オリエンテーション 受持ち事例紹介	訪問演習① 技術演習①	訪問演習② 非常勤講師講義	看護過程① 技術演習②	看護過程② 訪問演習③
２週目	訪問演習④技術演習③ 看護技術確認テスト	看護過程③ DVD 学習	看護過程の記録 まとめ　　講義	受持ち事例 看護過程発表	最終カンファ レンス

＜2 週目＞

(1) 計画表に沿って実習を展開する。

(2) 訪問看護過程は ICF（国際生活機能分類）の視点を意識しての展開を、担当教員が指導した。学生全員が受持ち事例の訪問看護過程の資料をホワイトボードに貼りプレゼンテーション後、ロールプレイを実施し、評価を行い事例からの学びを深める。（写真）

(3) 最終日の最終カンファレンスで、参加メンバー全員でのディスカッションを通して知識の共有をする。

(4) 訪問看護に必要な基礎看護技術の理解確認のための、確認テストを実施する。

(5) 実習のまとめとして、国家試験問題（100 問）を解き今後の国試対策に役立てる。

４．実習評価

既存の「在宅看護実習評価表」を用い、学生の自己評価と１クールごとに担当教員を決め、実習目標の６項目について４段階 25 項目で担当教員が評価をし、その後在宅看護領域教員全員で協議の上、総合的に評価した。

写真　　演習風景

Ⅴ．結果

1．結果の概要

1）学生が選択した受持ち事例の割合

①脳血管疾患 37.3%②がん 25.4%③ALS 16.9%④慢性呼吸器疾患 8.5%⑤統合失調症 8.5%⑥小児 3.4%であった。

2）在宅看護学内実習の評価　（図Ⅰ）

図１に示す通り、目標 1～4 は平均 3.18 点、多職種連携は 2.99 点、実習態度は 3.77 点であり、総評価点の平均点は学生自己評価 83.2 点、教員評価 84.2 点であった。

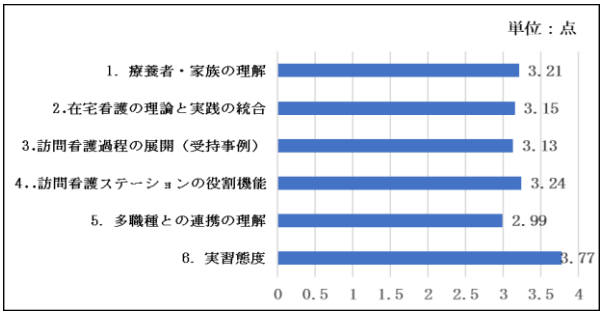

図１　実習評価　（n:59）

3）抽出されたコード数は「学内実習における学び」327、「実習内容に対する意見」129 の合計 456 が抽出され、67 サブカテゴリー、10 カテゴリー、5 コアカテゴリーが形成された。

2．在宅看護学内実習における学び（表 2）

【在宅看護の特徴と看護の実際（185 件 56.6%）】のうち『療養者・家族の理解（71 件 21.7%）』『在宅における看護技術の方法・工夫（70 件 21.4%）』『訪問看過程の展開（44 件 13.5%）』、【地域連携・地域包括ケアシステムの理解（55 件 16.8%）】【訪問看護師の役割・姿勢（87 件 26.6%】であった。

表２　在宅看護学内における学び

コアカテゴリー（3）	カテゴリー（5）	サブカテゴリー（40）	コード（327）
在宅看護の特徴と看護の実際	療養者・家族の理解	価値観を尊重した看護の提供	15
		家族を含めた情報収集、アセスメントの重要性	15
		信頼関係の構築は継続に繋がる	9
		終末期を含む意思決定支援の重要性	7
		介護者の負担や不安軽減のための支援	7
		家族を含めた援助の重要性	7
		生活者として捉えることの大切さ	5
		ICFの理解は適切なケアにつながる	3
		コミュニケーション力が大切	1
		自宅療養がもたらす心理的効果	1
		対象の年齢は幅広い	1
	看護技術の方法・工夫	在宅ならではの技術・代用品が学べた	35
		技術演習はこれまでの再学習となった	10
		DVD・web学習後の演習は効果的であった	10
		マナー・第一印象がとても大事	7
		実際の体験は今後に役立つ	5
		模型を使用した演習はイメージしやすかった	2
		解剖学の視点の重要性	1
	訪問看護過程の展開	ロールプレイは実際の場面の学びにつながった	26
		5事例を学ぶことで知識が深まった	11
		ロールプレイで援助の改善点が明確になった	3
		受け持ち事例がイメージできた	2
		アセスメント力が身に付いた	1
		訪問看護過程の一連の流れとその大切さを学んだ	1
地域包括ケアシステム	地域連携・地域包括ケアシ	多職種連携・情報共有の大切さ	23
		社会資源活用は適切なサービスにつながる	10
		臨床看護師の退院支援の役割と重要性	9
		制度の理解は地域包括ケアに役立つ	8
		介護保険料・診療報酬などの知識が深まった	5
訪問看護師の役割	訪問看護師の役割・姿勢	看取りでの意思決定支援の大切さ	33
		ステーションのイメージ、臨床と在宅看護の相違の理解	27
		療養者・家族を予防から看取りまで丸ごと見る大切さ	7
		療養者の価値観・ライフスタイルを尊重する大切さ	5
		臨機応変・先を予測した対応	4
		対応には共感・傾聴が重要	3
		信頼関係は情報収集や支援に不可欠	3
		療養者・家族へ知識・技術を提供し自立支援の大切さ	3
		経済的な面も考慮した提案	2

3. 在宅看護学内実習の対する意見（表３）

【実習指導内容に関する意見(91件70.5%)】『実習内容への意見（31件24.0%)』『実習全体への感想(29件22.5%)』≪じっくり取り組むことができ印象に残る実習であった≫9件、≪療養者・家族の心に寄り添うことが理解できた≫5件、≪在宅看護の理解が深まった≫4件、『実習教材・記録への意見・要望（21件16.2%)』≪事例の情報が少なく訪問看護過程展開が難しかった≫17件、『学内実習になったことの不満(10件7.8%)』、≪臨地に行けず残念だった≫8件、≪深く学べるか不安だった≫2件、【学生の自己成長に関する気づき】『今後の課題・目標（38件29.5%)』≪多くの学びが

表３　在宅看護学内実習に対する意見

コアカテゴリー (2)	カテゴリー (5)	サブカテゴリー (27)	コード (129)
実習指導内容に関する意見	学内実習内容への意見	常に教員がいる体制は細かく指導を受けやすい	8
		非常勤講師からリアリティさを感じられもっと来てほしい	7
		国家試験に役立つ実習だった	6
		訪問看護活動や臨時実習の一日の流れを知りたかった（DVDや教員の話から）	4
		料金等の計算方法が難しい	3
		ロールプレイの方法として、事前説明や見本の提示を十分にしてほしかった	2
		記録・演習がバランスよく計画され負担が少なかった	1
	実習全体への感想	じっくり取り組むことができ、印象に残る実習だった	9
		療養者・家族の心に寄り添う事が理解できた	5
		在宅看護の理解が深まった	4
		丁寧な指導やグループワークにより楽しく学べた	3
		学習環境を調整してほしい（長時間の丸椅子は疲れる、DVD視聴時の照明）	2
		臨床に求められる役割が理解できた	2
		ロールプレイすることで援助の個別性が理解できた	2
		学内でもステーションで実習したような感じがした	1
		訪問看護は思っていたより責任が重い	1
	実習教材・記録への意見・要望	事例の情報が少なく訪問看護過程の展開が難しかった	17
		記録に追われ演習時間が不足した	3
		写真付きテキストはわかりやすい	1
	学内実習になったことの不満	臨地に行けず残念だった	8
		深く学べるか不安だった	2
学生の自己成長に関する気付き	今後の課題・目標	多くの学びがあり今後に活かしていきたい	13
		療養者・家族の立場に立って支援していきたい	8
		在宅看護に興味がわいた	8
		看護師になってもコミュニケーションは大切にしたい	4
		自己の看護師像が明確になった	3
		将来、訪問看護師を目指したい	2

あり今後に活かしていきたい≫13 件、≪在宅看護に興味がわいた≫8 件などであった。

VI. 考察

在宅看護の対象はすべてのライフステージの人々とその家族を対象として看護を提供する活動である。そして、在宅看護実習は訪問看護ステーションでの同行訪問を中心に、在宅における看護活動の体験を重ねている。病院実習とは異なり、毎日様々な対象の居宅を訪問し、個々の家庭の生活環境や療養者の健康状態をアセスメントし、基礎看護技術をアレンジしていく視点が求められる。しかし、COVID-19 の影響を受け、臨地に出向くことができず、想像の中での実習となったことで演習や DVD 学習などの代替措置により、知識・技術の習得について実践的な内容を修得させるために工夫を要した。学内実習を計画・実施する上で考慮したこととして、学生全員が実習内容に差を感じないように、同じ内容の体験ができことを考慮し、既存の在宅看護学実習要項の内容に沿い内容と方法を一部変更しながら実施計画を立案し、展開した。

1. 在宅看護学内実習における学び

「学び」については 3 つのコアカテゴリーが抽出された。【在宅看護の特徴と看護の実際】では生活の場で看護を提供する在宅看護は療養者の身体的・精神的状況と家族を含めた生活環境の状況を把握するためのアセスメント能力が求められ、『療養者・家族の理解』では≪価値観を尊重した看護の提供≫≪家族を含めた情報収集・アセスメントの重要性≫≪信頼関係の構築は継続につながる≫という内容が 71 件中 39 件であった。このことから、療養者・家族の理解のためには、訪問看護師に求められる特有な技術として、限られた時間内での看護の提供に加え、アセスメントすることの大切さを感じ取っていたものと考える。さらに、在宅療養を継続して支える介護者の負担軽減への配慮が必要であり≪介護者の負担や不安軽減のための支援≫≪生活者としてとらえることの大切さ≫などを学んでいた。また『在宅における看護技術の方法・工夫』では≪在宅ならではの技術・代用品が学べた≫≪技術演習は再学習になった≫≪DVD 学習・Web 学習後の演習は効果的だった≫などが挙がり、看護技術については、実習の事前課題として提出させた学生各自の資料の活用が役立った。さらに、DVD 教材（具体）から言語による説明（抽象）への学習提示は学生にとって DVD 視聴という具体的な経験により、教材内容の具体的な部分を目で確認し、それが思考の手掛かりとなり、イメージ化が容易になったと考える[3]。視覚教材活用による学習の効果は、実際の場面をイメージ化でき、在宅看護を学ぶ上で大切な要素であり、円滑な学習につなげることができたと思われる。また、在宅では療養期間が長期にわたるため、経済的負担への工夫・配慮が求められる。≪在宅ならではの技術・代用品が学べた≫では簡易式ケリーパッドやペーパー便器の作成、ペットボトルやカップヌードル空容器の再利用方法などの体験は経済的負担軽減や療養のための安心・安楽な看護につながる学びとなったと思われる。

受持ち事例を通しての『訪問看護過程の展開』では≪ロールプレイは実際場面の学びにつながった≫≪５事例を学ぶことで知識が深まった≫≪受持ち事例のイメージがついた≫などが挙がった。ロールプレイは学生がその役を演じることで看護の対象や看護者について模擬的に経験し、理解を深めようとするためである[4]。このことから、ロールプレイの体験により、学生自身が気づきや新しい発見、更には行動変容につながったものと思われる。また、基本情報シートから情報収集する中で、どの部分が ICF の各項目の情報となるのか、不足する情報は何かを抽出し、補足していくための情報収集に時間を十分に当てることができた。療養者・家族からの直接的な情報収集はできなかったが、学生が想像の中で、情報に加える作業をしたことで、療養者を理解するために必要な情報や家族の気持ちを考える機会となり、受持ち事例を通して、療養者を一人の人間として捉え、深く考えることができていたと考える。さらに、訪問看護過程の展開内容をプレゼンテーションした後に、グループ全員で役割を設定し、ロールプレイができたことは、学生自身はもちろん、他学生にも深い学びにつながったと思われる。そして、同じ事例でも看護としての一人一人のとらえ方が違うことや、様々な視点があることを感じ取ることができていたことも評価できる。臨地での実際の体験はできなかったが、在宅療養生活の様々な場面がイメージでき、療養者・家族を理解し、単に疾患を捉えるのではなく、在宅看護の対象を生活者として、全人的に捉える姿勢が持てたものと考える。次に【地域連携・地域包括ケアシステムの理解】については講義と DVD 学習後に訪問事例演習による紙面上での体験のみとなり、地域包括支援センターや関連施設の活動体験がなかったことで、イメージしにくかったと思われる。しかし、≪多職種連携・情報共有の大切さ≫≪社会資源の

活用は適切なサービスにつながる≫≪臨床看護師の退院支援の役割と重要性≫などが挙げられていた。在宅看護実習で、入院中の患者の退院支援・退院調整に目を向けられたことは、病院と在宅の連携の大切さ、在宅看護へのイメージの変化とともに病棟看護師の役割をさらに深めることができたものと考える。この項目については、講義と DVD 学習後の訪問事例演習による紙面上体験となったため、≪制度の理解は地域包括ケアに役立つ≫と理解はしているようではあるが、療養者を包括的にとらえるには不十分であると思われる。知識として体得し活かしていくためには、療養者の身体的・精神的側面の理解に加え、社会的側面を支援するためのケアマネジメント能力が必要である。さらには、療養者の経済的側面にも触れるなど訪問看護活動以外のサービスの組み立て、社会保障制度、診療報酬、訪問看護報酬などについての理解が求められることから、学習指導内容の強化が必要であると思われる。実習評価を見ても、図１に示す通り、この項目が 2.99 点と最も低値であり、対策を講じる必要があると考える。【訪問看護師の役割・姿勢】では≪看取りでの意思決定支援・プロセス・エンゼルケアの大切さ≫≪訪問看護ステーションのイメージができ臨床と在宅の相違の理解≫≪療養者・家族を予防から看取りまで丸ごと見る大切さ≫などが挙げられた。在宅看取りについて学びが多かった背景には、訪問看護の臨場感を味わってもらうために非常勤講師である訪問看護ステーション所長の「生の声」として伝えて頂いた中で、看取りの事例紹介が学生の心に響く内容であり、印象深かったものと推察する。

今回の学内実習の実践では実習内容に差異が生じないように、平等性を意識して実施した。実習の前半グループの学生の反応・感想をみると“特に不満ややり残した感覚もなく、個人的には今までのどの実習より学びを深めることができた”“本当に実習に行った感じがした”“学内実習であっても、本人の価値観や思いを尊重した援助を、他の領域に比べ深く学ぶことができた”の記述があり、後半グループの学生の反応・感想には“本人や家族の希望に沿った看護ができ、大きな力になれる事が病院とは違い、訪問看護の魅力だと感じた”“学内実習であったが、本当の実習と同じくらい学べることが多い実習になった”“多くの事例について疾患を調べロールプレイ、演習を行い、訪問看護ステーション所長の話を聞くなど学内ならではの学びができた”の記述から、実習全体を通して、学生は全体を通して、同じような体験ができ、指導内容には差異はなく平等性は確保できたものと考える。また、学生一人一人に対応ができ、学内実習ならではの体験や学びにつながったと評価できる。

2. 在宅看護学内実習の対する意見

【実習指導内容に関する意見】では『実習内容への意見』≪常に教員がいる体制は細かく指導を受けやすい≫≪非常勤講師からリアリティさを感じられもっと来てほしい≫≪国試に役立つ実習だった≫では、教員が学生一人一人とじっくり関わることができ、在宅看護に対する知識・考え方を確認することにつながり、在宅看護活動に対する意識づけになったと考える。また、現場で活躍中の訪問看護ステーションの訪問看護師の招聘は訪問看護活動に対する疑問や質問に対しての対応が円滑であり、現場の状況をイメージしやすかったと思われる。『実習全体への感想』では≪じっくり取り組むことができ印象に残る実習だった≫≪療養者・家族の心に寄り添うことが理解できた≫≪丁寧な指導やグループワークにより楽しく学べた≫などが挙げられ、在宅看護学概論、在宅看護援助論の講義時の講義資料や事前学習課題レポートは実習時にも活用し、知識と実践に結びつけることができる教材として効果的であったと考える。また『実習教材・記録への意見・要望』≪事例の情報が少なく訪問看護過程の展開が難しかった≫≪記録

に追われ演習時間が不足した≫などが挙げられた。実習を進める中で学生からの情報を聴き入れ、学内実習内容を理解し、知識が深まるように、学内実習用の演習用記録用紙（訪問看護演習、看護技術演習等）を作成、修正して活用した。実習開始当初は訪問看護事例について、基本情報を中心に提示したが、ICF の視点での捉え方や療養者・家族の思いを捉えるには不十分であったため、実習途中から情報量を増やすなど工夫を凝らし提示したことで、情報収集内容が深まり改善できたと思われる。また、『学内実習になったことへの不満』≪臨地に行けず残念だった≫≪深く学べるか不安だった≫と少数意見ではあるが挙がった。学生の心情を考え、今回の学内実習で学生全員が実習による理解に差が出ないように実習内容を実践した。実践中、実習当初は受持ち事例の情報提供不足や演習資料の準備不足のため、看護過程の展開に苦慮する場面もあり、学生へ不満を感じさせる場面もあった。しかし、学生からの意見や反応を見ながら、修正を加え進めたことで、戸惑いなく実習が展開できたと思われる。【学生の自己成長に関する気づき】『今後の課題・目標』では≪多くの学びがあり今後に活かしたい≫≪看護師になってもコミュニケーションを大切にしたい≫≪自己の看護師像が明確になった≫≪将来訪問看護師を目指したい≫などが挙がった。学内実習ではあるが、訪問看護ステーションでの実習であることを意識づけるために実習要項に示した通りの服装や身だしなみ、社会人としてのマナーを指導し、「実習の始まり」「昼休憩」「実習の終わり」の挨拶は毎日グループリーダーが実践した。また COVID-19 禍であることを意識させ、健康チェックや行動に注意するように指導した。さらに、在宅看護実習は在宅という病院実習での経験とは異なった環境での対応であるため、グループ内で情報を共有し、共に学ぶ姿勢や社会人としてのマナーに沿った行動、プライバシーに配慮することの大切さを行動に表すことができていた。評価点も 3.77 点と評価 6 項目中、最高値であったことから、成長の様子がうかがえ、専門実習の最終段階でもあり、在宅看護実習 4 年次配置は有効であると考える。さらに非常勤講師である訪問看護師との交流を通して、その人柄に触れ、学生にとって、看護職としての心の糧を蓄積していくことにもつながり、切磋琢磨しなければならない自分自身に気づき、取り組むべき課題を認識できたと考える。この体験により、知識と体験が結びつき、今後の看護に対する認識を深められたものと思われる。

今回の体験を通して、今後の在宅看護教育における実習の在り方について、COVID-19 などの非常時の対応への指導内容の充実および通常の実習への課題が明らかとなった。

Ⅶ. 今後の課題

1. 感染状況が不安定な COVID-19 禍において、地域での感染状況を踏まえ、臨地実習の機会が制限された場合でも、安定した柔軟な実習指導体制がとれるための「学内実習要項」の作成をする。
2. 学内実習は学生が事例にじっくり向き合うことができ、在宅看護に対する知識の獲得、視点の変化を感じ取っていたため、実習期間中に組み入れることは効果的であることから、これまでの学内実習の内容を見直し、充実した実習展開を検討する。
3. 看護技術援助（経管栄養、吸引、摘便、おむつ交換など）を安全・安心・安楽に提供できるように、事前に学内での演習の機会を増やし、そのための教材の充実を図る。
4. 地域包括ケアシステムを理解していく中で、身体的・精神的側面の理解に加え社会的側面を支援するためのケアマネジメント能力も必要となるため、療養者の経済的側面や訪問看護以外のサービスの組み立て、社会保障制度、診療報酬、訪問看護報酬などについての学習内容を強化する。

5. 現場で活躍中の訪問看護師の存在は効果的な実習につながるため、今後も訪問看護ステーションと連携を密にし、非常勤講師を常に確保できる体制整備をする。

引用・参考文献

1) 日本看護系大学協議会,「新型コロナウイルス感染拡大にかかる、看護系大学への影響及び対応に関する調査」(第2弾),2020.4.8
2) 文部科学省,新型コロナウイルス感染症に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について, 事務連絡2020.6.1
3) 清水美和子他,在宅看護論実習におけるDVD 教材を用いた直前オリエンテーションの有用性―異なる 2 つの展開パターンを比較して-,高崎健康福祉大学紀要,第 11 号,99-110,2012
4) 藤岡環治他 編:シミュレーション・体験学習,わかる授業をつくる看護教育技法3,医学書院,P1-14,2010
5) 小路ますみ他,在宅看護実習における学びの構造,福岡県立大学看護学研究紀要,4(1),P17,2007
6) 増田容子,在宅看護論教育における教育内容の現状と教育の方向性,九州看護福祉大学紀要,Vol9,No1,7-15,2007
7) 平松万由子他,在宅看護実習における学習効果-実習形態の相違による比較-,三重看護学資,9巻,55-61,2007
8) 中根洋子,在宅看護のイメージ化への校内学習の効果-ロールプレイング終了後のアンケート分析を通して-,東京医科歯科大学看護専門学校紀要,第14号,1号,2004
9) 細川陸也他,京都大学における COVID-19 流行下の保健師教育課程教育実習①オンライン代替実習の実践報告,保健師ジャーナル,Vol76、No10,2020
10) 内藤恭子他,自己評価表を用いた在宅看護論教育効果の検討1-授業後の尺度別・介項目別特典からの学びを考える-,第42回日本看護学会論文集,地域看護,P221-2224,2012
11) 江頭典江他,新カリキュラムにおける在宅看護実習の方向性について-臨地実習を終えた学生にアンケート調査を行って-,京都私立看護短期大学紀要,第35号,2010
12) 礒邉厚子,訪問看護ステーション実習で学生は何を学んだか - 実習期間の拡大と実習評価を取り入れて -, 京都私立看護短期大学紀要,第33号,2008
13) 田口理恵他,在宅看護過程における残後計画立案の基盤となる能力,共立女子大学,2巻P1-9,2015
14) 日本看護系大学協議会看護学教育向上委員会, 看護学実習ガイドライン,2019.12.23
15) 日本看護系大学協議会看護学教育向上委員会,大学における看護系人財養成の在り方に関する検討会,第二次報告看護学実習ガイドライン,2020.3.30
16) 日本看護系大学協議会,高等教育行政対策委員会,2020 年度看護系大学 4 年生の臨地実習科目(必修)の実施状況調査結果報告書,2020.9.2
17) 石垣和子・上野まり,在宅看護論 - 自分らしい生活の継続を目指して - 南江堂,2019
18) 押川真喜子,写真でわかる訪問看護アドバンス,インターメディカ,2020

執筆者紹介(所属)

壬生　寿子　八戸学院大学　看護学科　教授
日當ひとみ　八戸学院大学　看護学科　助教
田向たまき　八戸学院大学　看護学科　助手